

5月5日(金) 日に新たな経営を

よく長い歴史と伝統を持った“しにせ”と言われるところが、経営の行き詰まりに陥ることがある。そういうところは正しい経営理念を持たないかという決断してそうではない。むしろ、創業以来の立派な理念が明確に存在している。

しかし、そうしたものを持ちながら、それを実際に適用していく方針なりやり方に、今日の時代にそぐわないものがあるわけである。もちろん、旧来のやり方でも好ましいものはそのまま続けられればいいわけだが、やはり時代とともに改めるべきは改めていかなければならない。

その時どきにふさわしい日に新たな経営があつてこそ、正しい経営理念も永遠の生命を持って生きてくるのである。

5月6日(土) 断絶はない

最近の若い人たちの考え方が変わってきているといえは変わってきている。そしてそこから断絶という受けとめ方も出てくるけれども、おとなと若い人の中には、いつの時代でもある程度の隔たりはあつたわけである。しかしそれは考え方の違いであり、断絶とは考えられない。それを何か断絶という言葉におどらされて、おとなが言うべきことも言わないというのは、非常によくないことだと思う。断絶という言葉のみずから離れてしまつてはいけな

い。断絶はない。しかし青年と中年、老人とではおのずと考えが違ふ。永遠にそうなんだ、と考へてそれを調和していくところに双方の努力と義務があると思う。

5月7日(日) 派閥の活用

“派閥の解消”ということがよく問題にされる。しかし考へてみると、私は派閥というものはおよそ人間の集まる場所、どこにでもついてまわるものだと思う。派閥をつくるのはいわば人間の本能であつて、いいとか悪いとかいう以前の問題ではないだろうか。

それならば、むしろ派閥を肯定した上で、これを活用していくことを考へてはどうか。つまり、各人がバラバラでいるよりもいくつかのグループになつていた方が、全体としてまとめやすく、より能率的に事が運べるわけである。派閥は解消できない。むしろあつていい。大切なものは、派閥を真に生かす、心の高まりだと思ふのである

5月8日(月) みずからを教育する

人間の教育にはもちろん立派な校舎も必要であり、環境も必要でしょうが、それのみに頼つてはならないと思ふのです。行政の充実により、なるほど環境はだんだんよくなっていくでしょう。しかしそういう環境がつくられたとしても、その中でそれぞれの人がみずからを処して、

みずからを教育してゆく。自問自答しつつ、より高きものになつてゆくということを怠つては、決して立派な人間は生まれてこないと思ふのです。

きょうよりあす、あすよりあさつてと、みずからを高めてゆくところに人間の成長があり、またそこから立派な人間が生まれてくるのではないのでしょうか。

5月9日(火) 社員学の第一歩

社員はまず、社長をはじめ首脳者というもののかいかに忙しい仕事をし、いかにその職責が重大なものであるか、ということを知つていただきたい。私は社員学の第一歩は、そこから始まると思ふ。またそういうように、社員が首脳者の苦勞を知ると同時に、社長や会社の幹部は、社員立場に対して理解を持ち、そして社員の働き、苦勞に対して大いに感謝することが大切である。

こういうようなことに双方がなると、どんな事業でも成功すると思ふ。またそういう考へ方がどの程度にあるのか、ということによつて、その会社の将来を非常にはつきりと判定できると思ふのである。

5月10日(水) 衆知を集める経営

会社の経営はやはり衆知によらなければいけません。何といつても、全員が経営に思ひをいたさなければ、決してその会社はうまくいかないと思ふのです。社長がいかに鋭い、卓抜な手腕、力量を持つていたとしても、多くの人の意見を聞かずに、自分ひとりだけの裁断で事を決することは、会社の経営を過つもとだと思ひます。世間一般では非常にすぐれた一人の人かワンマンで経営すれば、事がうまくいくということをよく言ひますか、社長一人で事を遂行することはできませんし、たとえできても、それは失敗に終わるだらうと思ひます。やはり全員の総意によつていかになすべきかを考へねばならないと思ふのです。

**5月11日(木) 熱意あれば**

人の上に立つ指導者、管理者としての要諦というものはいろいろ考へられるけれども、その中でも最も大事なものの一つは、熱意ではないかと思ふ。非常に知恵、才覚において人にすぐれた首脳者であっても、この会社を経営しようということに熱意がなければ、その下にいる人も、「この人の下で大いに働こう」という気分になりにくいのではないだろうか。そうなつては、せつかくの知恵、才覚もなきに等しいものになってしまう。みずからは他に何も持つていなくても、熱意さえ保持していれば、知恵ある人は知恵を、力ある人は力を、才覚ある人は才覚を出して、それぞれに協力してくれるだらう。